# シュッツの言語理論と「自己論的アプローチ」
## ――『物語のなかの社会とアイデンティティ』再考――

佐藤　嘉一*

「意図された二層性」：それにしても本書が明示する「自己論」は，著者が指示するように行為論や構造論とたんに並置されるべきものなのだろうか。前者は後二者を「基礎づける」関係にあるのではないか。少なくとも本書が「社会の現象学」を……展開するのであれば，この点は明確にされなければならない決定的な理論的分水嶺といってよい。［張江洋直（2005，202）］「著者，主人公そして読者」：とすると，ここには二つの語りの領域が存在することになりはしないか。すなわち，主人公が日記という文体を用いて自らを語る領域」と著者が日記という文体を用いた作品によって読者へと語る領域と。［浅野智彦「『私』はどこにいるか。（2004，33asano.html）］

**キーワード：体験，言語，概念，生の形成，語る「私」，書き手・主人公・読み手，ゲーテの「統一と展開の法則」，発生論的現象学**

### はじめに

拙著『物語のなかの社会とアイデンティティ』（2004）について社会科学基礎論研究会主催の合評会（2004・12／東京学芸大学）で浅野智彦氏，張江洋直氏などから大変有意義なコメントをいただいた。その後もＨ氏から「真摯にきちんと答えろ」という催促があり，評者諸氏のコメントに対して未回答であることが気がかりであった。「物語を読む」，特に「私語りの小説」を読む，その読み方の基本を拙著のなかで示そうとしたのであるが，評者諸氏からの重要な問題提起をふまえ「自己のなかの社会の現象学」とは「私」にとって何かについて，もう一度考えてみたいと思う。

言語作品 Sprachwerk を論ずることの厄介さについてアルフレッド・シュッツは次のように述べている。「言語作品は自ら言語に囚われている手段では決して解明されえない。なぜなら言語による分析の試みは同じように一連の言語の象徴 Symbol を用いなければならず，必然的に論点先取りの誤謬に陥るからである」［Schütz, 1981: 251］。さらに加えて次のような彼の指摘も一考に値する。――物語小説を論ずることの難しさは，物語小説にはそれに特有の言葉との関係があり，そのために余計にこの問題が縺れるのである。アリストテレス以来の「詩学（ポイエーシス）」（創作論）の伝統は「創作」についてその主題の表現可能性を叙事詩・戯曲等と種々に区別し，それぞれのジャンルに特有の技術的前提について論じてきたが，このジャンルの違い

＊立命館大学名誉教授

は単なる表現手段の違いというよりも，もっと遥かに深い，もっと本質的な「表現の実質」の違いに由来する，と［ibid］。

1928年頃の初期草稿「小説の意味構造：ゲーテ」の書き出し部分からの引用である。

以上の指摘は言語作品にとって言語とは何であるか，これについて明らかにすることの必要性を私たちに示唆している。言語は言語作品にとって何であるか，この問いは当然ながら「言語とは何か」（A）もしくは「言語作品とは何か」（B）の何れか一方の問いのなかに縮減して一元化することはできない。そうではなくて，２つの異なる問いのなかに潜在する有機的円環，（A）と（B）の関係を見出すことが問われているのである。有機的円環の鍵はなにか。これは容易くみえて厄介な問いである。

先に掲げた２人の評者による拙著『物語のなかの社会とアイデンティティ』に対するコメント――「意図された二層性」の問題および「著者・主人公そして読者」の問題――は「言語は言語作品にとって何か」という問題に深く関わりのある問題である。やがて述べるように「意図された二層性」の問題は（A）の問題を前面に押し出しながら，また「著者・主人公そして読者」の問題は（B）の問題と深くかかわりあいながら，その上で２つの問いの「結びつき」の内的特徴を明らかにせよという要請である。そして拙著の「自己のなかの社会の現象学」の試みのあいまいさは偏にこの（A）と（B）の有機的円環をめぐる考察の不徹底さに由来しているといわねばならない。

## １．体験と言語と概念

### ⑴「第３の領域」としての言語

言語とは何であるか。この問いがシュッツの場合「物語」を読んだり，語ったりするものの関心から出発していることに留意すべきである。

①「語る私」の視座から

> ――思考する私からではなく，語る私から，自分の体験を表現したり伝えたりする私から出発した私たちからすれば，諸概念から展開される命題が考察の対象ではなく，言語による，体験や汝が結びつけられる命題が考察の対象である。しかしその体験内容の存在がなににによって表明されるかを同時に確かめることなしには，私たちはその体験の内容が存在するとして受け入れることは不可能である。私たちがもっと深いさまざまの領域で自分たちの体験を意味に作り上げた，その意味を語る私たちからすれば，その論理整合性がではなく，むしろ私たちの［生の］持続経過との適合性がその現実の本質的な現れの形式なのである。けれども言語の魔術により概念と体験とは１個の分離しがたい統一体となる。体験世界の現実の持続経過の流れ，概念の世界の担い手によって担われて，言語は，言語固有の不思議な国，すべてがそのなかで成立するがゆえに，あらゆる矛盾が解決される，本当に第３の領域 drittes Reich を形成するのである。［Schütz: 1981, 244］

まず，誰が言語に近づくか。「語る私」「自分の体験を表現したり伝えたりする私」である。

言語の何が問題か。私の体験は言語によってどのように表現され伝達されるか，どのように体験した内容が適切に言語によって表現（象徴）され伝達されるか。言語による私の「表現や伝達」の行為の問題である。言語命題の意味「適合性」である。「言語命題の論理整合性がではなく，私たちの持続経過との適合性がその現実［＝言語命題］の本質的な現象の形式である」。シュッツの言語論の要諦は，このテーゼにある[1)]。

②一致と不一致

①で述べたように「言語の問題」とは，シュッツにとって言語そのものではなく言語の象徴（的行為）の問題である。言語とこれによって象徴されるものとの関係の問題である。この点についてさらに詳しく検討してみよう。

> 「この象徴関係の本質は，私意識の原初的領域では象徴と象徴されるものとは一致するIdentitätが，その都度の生の形式の諸領域では象徴と象徴されるものとは不一致Diskrepanzである点にある」（傍点原書ではイタリック）［Schütz: 1981, 110.］。

「生の形式」とは「私意識の世界に対する態度」の意味である。象徴するものと象徴されるものの「完全な一致」。それは「創始 origio」としての「原初の私」の生の形式である。他方「記憶する私」「行為する私」「汝の関係する私」などの「生の形式」は，原初の私の「生の形式」とは異なり，「象徴されるもの」と「象徴するもの」との間に多少のずれと不一致がみられる。不一致の極端が「完全な不一致」すなわち「概念する私」の生の形式である。

> 完全な一致における私，純粋な持続における私，純粋持続，純粋な質体験，延長のない領域，連続と永遠の流動，分割不能な多様性，自由，心象，それ自体無意味である，象徴の誕生以前，それ故原理的に価値自由であり，しかも孤独，体験としての世界。［ebd. 111］
>
> 完全な不一致における私，概念的論理的な私，純粋な時空間，すべて量化可能な，延長の領域，不連続，絶え間のない形成，分割可能な同質性，必然性，概念，意味体系の複合的構築と意味体系の純粋論理への解消，それゆえに完全に価値に方向づけられる，そして本質的に社会的，形式（表象）としての世界。［ditto.］

私意識の原初的領域では象徴と象徴されるものとは一致しているが，その都度の「生の形式」の諸領域では象徴と象徴されるものとは不一致であること，これが象徴関係の本質である。その象徴関係の「一致」と「不一致」の両極の一方に「原初的な私」の純粋持続の意識があり，もう一方の反対極に純粋な論理的形式的概念がある。「一致」と「不一致」の両極がいずれも「私の生の形式」（「私意識の世界に対する態度」の現れ）であるなら，「一致」（「孤独な，体験」）から不一致（「本質的に社会的概念」）への展開も，また不一致から一致への統一も，「私意識の世界に対する態度」という同一のもの（「意識の志向性」）の「異なる形式」（「注意変様」）として把握することができるだろう。ではなにがそしてどのようにこの循環の過程を媒介するのか。ここに言語問題への着眼がある。「語る私」の言語による体験と概念の媒介の問題である。「語る私」問題とはこの体験・

言語・概念の関係を内在的・弁証法的に把握することでなければならない。

### ⑵閉じられる扇と広げられる扇

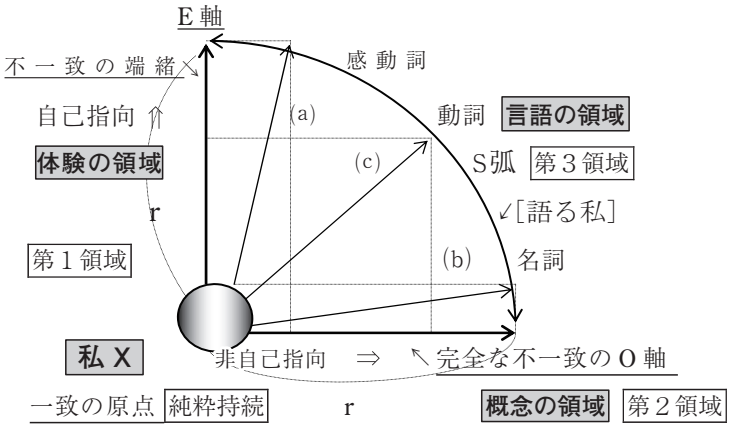
①体験と概念

この生の２形式の矛盾的同時存在にしばらく目を留めてみる。象徴するものと象徴されるものとの「完全な一致」と「完全な不一致」。シュッツによれば「体験」と「概念」，一致と不一致の両極が「言語の不思議によって一個の分離し得ない統一体になる」。体験に近づく言語と概念に近づく言語の「二面性」。

いま，この相反する「生の形式」の様態を扇に喩えてみる。閉じた扇の形状と広げられる扇の形状。閉じた扇は世界に対して全く無関心である。扇は対外的（世界）にも対内的（自己）にも自らを開かない。扇は自らの絵姿を繰り広げることなく自足する。世界内存在としての「純粋な持続」を生きる「原初的私」の「生の形式」の姿である。私の世界との関係は未分化のままに自足し，象徴されるものと象徴するものが同一，即ち一致である。無垢の至福というべきか。扇を広げる。その両脇の薄板はそれぞれ異なる方向に伸び，「不一致」の形状を呈する。不一致のうちに広げられる扇は，外部から涼風を呼び寄せ，内部の絢爛豪華な絵図を顕わにする。原初的な私の同一性と不一致の関係の構図は図１の「扇形」として描き出すことができる。

②生の形式の「発生論」的現象学

象徴されるものと象徴するものとの「一致」は，閉じた扇のように，最初「生への注意」が生身の「私」自身のうちに留まる（一致の原点 x としての「純粋持続」＝扇の要）。「一致」の原点からの不一致は「自己の記憶」に発する。私の生身の「純粋持続」のなかから「記憶を付与された持続」（たったいま，いまなお）があらわれる。純粋持続からのこの不一致は「体験」領域の意味構築の方向へと図の（a）「私は感じる」（＝感動詞）の左辺近傍において「垂直のベクトル」r をたどるであろう（＝自己指向）。また，私における「空間意識」の発生以後に成立する「不一致」は，あらゆる対象（非自己）世界へと私の意識を向けさせ，（b）「私は命名する」（＝名詞）の右辺近傍において「水平のベクトル」r をとるであろう（＝非自己指向）。




(a)私は感じる
(b)私は名づける
(c)私は行う

**図１　さまざまな生の形式の全体図**

勿論これは「理念型」（ヴェーバー）にすぎない。理念型的に描出される扇の開閉の形状から，(a) と (b) に加えて，さらに空間意識の発生にかかわる (c)「私は行う」（＝動詞）のベクトルの方向が発想される。「自己指向」と「非自己指向」のちょうど中間に態度づけられる「生の形式」。私は「働きかける wirken」，私は「行為する handeln」である。対象（非自己）への指向と自己への指向との「中間」。私に対する関心と私以外（汝を含む非自己）に対する関心とが現実的・直接的に出合うのは (c)「私は行う」である。

以上の配置図は「自然的態度における人間」［Schütz: 1960, 106］の姿に他ならない。この全体図のなかに言語は「第 3 の意味領域」（言語弧 S）として位置づけられる。「語る私」は，舞姫が手にする扇の表返し裏返しによって悲しみや喜びを表現するように，(a)「感じる私」の自己指向（第 1 の意味＝体験領域・E 軸）のほうへ，また (b)「思考する私」の対象指向（第 2 の意味＝概念領域・O 軸）のほうへ，さらには (c)「働きかける私」（行為指向）のほうへと，「言語」S の舞を舞う。言語は，一致の原点 X「純粋持続の私」（「体験」の根基 Wurzel）の距離 r の円周上に「不一致」のバロメーター「感動詞」「形容詞」「副詞」「動詞」「名詞」人称名詞「我と汝」などといった多種多様の象徴の針 (r) にあわせて舞いを舞う。言語は 2 つの姿において自己を現す。今ここを生きる発話のなかの言語」（遂行的行為 Handeln の言語）と語り終えた話としての言語」（達成的行為 Handlung としての言語）。現在時制のなかの発話と過去完了時制のなかの語り。言語の表と裏。言語はまさしく「体験」と「概念」の媒介者である。扇の表と裏を交互に転変しつつ悲しみが舞われるように，言語行為もときの流れに「意味」の綾を織る。意味措定と意味解釈の往復。言語の不思議さ。「言語の象徴」論は，やがて意識の「志向性」概念（フッサール）による「意味」構成の問題を介して，シュッツの「行為論的」社会学に結実する。

## 2．書き手・主人公・読み手

### ⑴書き手と読み手

私意識は，外部からくるさまざまな「体験」—事物の範疇や行為の範疇や汝など—に開かれているが，これらのいずれの範疇にも該当せず，これらを包含する 1 つの現象，「言語」現象に直面したのである。当面それが聞いた言葉，語った言葉，読んだ言葉，書いた言葉のいずれが「私意識」に入ってくるか，これらの違いは問わないことにしよう。「聴覚ないし視覚の現象と概念本性との調整 Koordinierung」のうちに言語の本質をみる，周知のソシュール理論［Saussure: 1949 ＝1982小林，96］にも，体験と概念の媒介者としての言語の象徴性という見方に到達した今，別段驚くべき新しい事実をみない。私意識にとって「語る」や「聞く」の聴覚現象，「書く」や「読む」の視覚現象が，もう一方の概念的表象との調整される様子を十分に承知したのであるから。

①二つの生の経過の「交点」

ところで「言語作品」の問題に触れるにあたり，言語をめぐるもう 1 つの問題，「汝」と私との関係について一言しなければならない。ある事物の存在の有無は，汝と私の「持続の交点」，つまり目と鼻の先に示して決着される。それと同じように，語る私の「言語による体験の象徴

措定」はもっぱら「私の私という統一体の内部において行われのではなく，むしろ最初に汝の本質を形づくる，2つの生の経過のちょうど交点 Schnitpunkt のところで行われる」[Schütz: ebd. 213]。言語による意味（象徴）措定は，汝が私に関係する「社会関係」を基点にもつということである。

言葉が誕生した後は「私ひとりだけの体験で，du 汝や du お前さんや du あなたのものではない体験はあり得ない」[ditto]。ある聴覚（声）や視覚（眼）の体験がある別の種類の体験（概念表象）に関係づけられる（シニフィ- シニフィアンの関係）ことがここでの問題ではない。注目すべきことは「言葉の象徴により象徴される体験は…必然的に汝関係のなかにおかれる」[ditto] ことである。「この変化の力は絶大であり，言葉が世界を新しく創造し，この新しい創造の優位さの蔭に，それ以外のあらゆる体験はヴェールで覆われたように消え失せてしまう。言葉はいまや世界を統治（支配）する。ものとその性質，感情とその強さ，行為とその経過は，私の特殊な体験の領域から完全に切り離される。言葉は汝の領域に直接属しているのだから，言葉は私と汝に共通するものを示すことができるだけである。」「私の個人的な体験は，言葉の及ばない領域にのみ見出すだけである。」「この世界が私の一部であることを，世界をみんなに分け与えてしまった，言葉はつかみきれない。」「言葉は一回起的なもの，唯一のもの，反復不可能なものを何も保存することを知らない。」「私のパーソナルな体験は言葉の届かないところにあるだけだ。」「私は以後私の体験世界のなかに生きるのではなく，いろんな体験で一杯の，各人の体験で一杯の言語世界のなかに生きる。」「言葉は事物の前に立ち，それを体験不可能にする。命名された事物があるだけであり，一個同一の言葉に属する，事物のグループがあるだけである」[Schütz: ebd. 214]。

「言語」，私と汝の「主観的な体験」をコーディネートする媒介者（間主観的意味の担い手）としての言語。語る汝，聞く私，書く汝，読む私等いずれも言語の領域の住人としては，もはや私や汝だけの主観的体験世界のなかには生きていない。いろんな体験で一杯の，各人の体験で一杯の言語世界のなかにともに生きている。―私と汝の交点およびこの両者の言語領域を図示することは容易である。図２にみるように，私の生（純粋持続）と汝（もう一人の私）の生

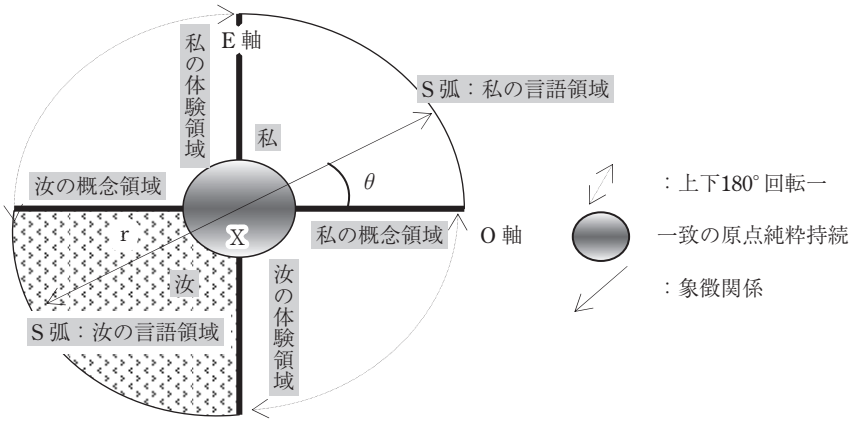



**図２　２つの生（汝と私）の経過の交点の図**

の経過が交点Xにおいて背中合わせに位置づけられる。両者はそれぞれ交点Xを原点とする円の半径rとO軸上の可変的な$\theta$角［$0° \leqq \theta \leqq 90°$］（第1象限および第3象限の）によって円弧上に図2に示した言語の象徴領域を現出する。それぞれの円弧の両端において「言語の象徴措定」（語る，聞く，書く，読む）を「汝が関係する私」と「私が関係する汝」は相互に繰り返す。意思疎通（コミュニケーション）すると言い換えてもよい―。重なりあって表裏一体，前後，左右あるいは上下に対照をなす2本の舞扇のように。そして，私と汝の間の距離，一致と不一致，親密さと疎隔の多様性にも目を留めなければならない。

②口問口答から「書き手―読み手」の問題へ

私と汝との「交点」の問題は「言語作品」を間にはさむ著者と読者の関係にも応用できる。言語表現による言語作品の「精神的世界の意味関連」［Schütz: ebd. 251］は，いうまでもなく「言語の領域」―当の著者における記憶の世界や行為の世界を通りぬけ，また汝関係の意味措定や意味解釈の世界を通り抜けるので，著者の「原初的体験」の世界から遥かに隔たった―のなかで開花する「私意識」の精華―「もの・こと」［広松：1983，10］に関する表現可能な事態の沈殿物――種の「達成的行為の意味構築物」である。読者がその言語作品に出合うのも，読者の「原初的体験」の世界から隔たった「私意識」の「言語の領域」においてである。著者も読者も「時間・空間と汝を含む社会関係のなかで生きている行為者」であり，それぞれのベースキャンプ（「原初的体験の領域」）から出発して，いくつものリアリティの次元を経由してたどり着く，言語モニュメント（「物語小説」）のある第三の地（「言語の領域」というだれでもの―汝だけでも私だけでもない―間主観的意味の世界）で交わるのである。それ故，書き手の「原初的体験」は「言語作品」のなかにどのように意味措定され，また読み手はどのようにこの「言語作品」を意味解釈するか，が問われなければならない。同じことであるが，言語上の間主観的意味連関（「言語作品としての小説」）にたいする書き手と読み手における「私意識」の態度 Einstellung の差等如何が問われなければならない。

「私と汝の交点」という言語発生の原点に立ち返ってみると，この「小説」Prosaerzählung―きわめて複雑な意味構成体である言語作品―を間にはさむ「書き手と読み手」の問題を直ちに考察の俎上に載せることは不適切である。なぜならボクとキミの間の「手紙」のやり取りといった単純な関係ですら，図2に示される「表裏一体」をなす，今ここにおける「私と汝の出会い」（純粋の我々関係）のような理念型から―時間的ならびに空間的差異化（今に非ず / ここに非ず）にともなう親密性から匿名性への移行を介して―乖離してしまうからである。言語発生の「交点」問題を簡明にするには，やはり書き手と読み手よりも社会的直接世界 Umwelt の語り手と聞き手の間の言語（的行為）問題を先行させるのがよい。

アリストテレスの詩学は「詩学の技術論」にすぎず「言語の本質」［象徴の問題］を捉えそこねているとシュッツが述べているが，それは，純粋に「言語」内部の関心（言語による制作・作品の構築 Construction 論＝達成的行為としての言語の位相）よりも，むしろ「言語の象徴」という言語の発生（「語る私」の生の形式＝遂行的行為の構成 Constitution の位相）に関心を

おくものの立場からすれば，当然の言い様なのである。若い母親とその幼児の言語以前 *vor*sprachlich のコミュニケーションをイメージしながら，「象徴」と「象徴されるもの」の一致関係から不一致関係への変遷如何，即ち面対面の関係にみる口問口答の形式から「小説」の書き手と読み手の社会関係の形式への変化を視野に収めるやり方のほうが問題の本質を見失わないですむ。

### ⑵ゲーテの「統一と展開の法則」

①〈*petitio prinzipii*〉を避ける方策

一番単純な「私と汝」の交点における言語的表現の象徴形式は，シュッツによれば，語り手の意味措定 Sinnsetzung と聞き手の意味解釈 Sinndeutung の２つの作用形式によって特徴づけられる［ebd. 253］。例えば「私（汝）が質問し，汝（私）が答える」という口問口答がそれである。「口問」とは話し手の私が表現すべき意味表象にとって適切であると思う言葉を選択し，その言葉の意味表象から，聞き手の汝も同じ意味内容を再生するであろうと仮定する。この意味措定作用において語り手の私は言葉を主観化する。「口問」の特徴は語り手の「主観的に思われた意味」の措定にある。これに対して聞き手である汝は「口答」の態度をとる。口答の特徴は何よりもまず語り手の口問の意味措定を，聞き手がその手元にある知識在庫（「話し方」という客観的意味連関図式）に分類し整理する，即ち，口問の主観的意味連関を解釈し理解することにある。これを理解した後今度は汝が「語り手」となり「口問」の流儀に従って，新たに「意味措定」（応答・返答）を遂行する。口答とは口問を解釈し応答することである。

口問の「意味措定」と口答の「意味解釈」はいずれも語り手と聞き手の「私意識」の「意味付与」作用（Meaning-constitution）である。しかしその性質は上述のとおり，異なっている―語り手はその態度において主観的意味連関から客観的意味連関の構築へ，聞き手はその態度において客観的意味連関から主観的意味連関の構築へ，である。態度の向きが正反対である―。しかも両者は相互補完的である。私と汝は「交点」において，それぞれの立場をおきかえ視座の相互転換をはかりながら「このような状況ではひとはどのように反応するであろうか」（ヴェーバー）という「言語の客観的意味連関」の表現図式（シュッツ）を媒介にして「意味措定」と「意味解釈」を交互に続行する[2)]。口問口答の連続が「対話」であり，言語作品では「ドラマ」となる。

しかしながら，ある語り手によって措定された意味連関「主観的に思念された意味」が聞き手によって「余すところなく理解」される，完全に客観的意味に変換できる（＝十全に意味解釈される）などと簡単に主張することはできない。日常生活における「勘違い」「聞き違い」「誤解」の類は別としても，とりわけ１つの文学作品（例えば芥川賞の候補作品など）について，評者による多様な解釈と評価がみられることからも明らかである。

両者の一致は「言語の領域の内部だけでは不可能である」［Schütz: ebd. 254］。むしろ語り手の主観的意味と聞き手の客観的意味との歩みよりは，「言語の領域自体が問題とならない，言葉の抑揚，顔の表情，身振り，声高な表現などによって促進される」［ebd. 255］。言語の論理ではない，言語現象のルーツにまで遡る問題（言語の外部や以前に横たわる），言語の発生が問題なのである。ついでにいえば，語り手は語

り手であるばかりでなくつねに聞き手でもある。このことからいわゆる「自問自答」が口問口答の一変種であることに気づく。語り手の「意味措定」と聞き手の「意味解釈」，意味付与作用の二重性が私（汝）と汝（私）とに内・外に分化して，対立と葛藤の開かれた循環関係のほうへ態度づけられないで，「私意識」の内部に滞留し，閉じられた循環関係に自足する。「独り」であることはたしかに「社会化の形式」（ジンメル）なのである。「日記」を書く営みも，いきつくところ「自問自答」の１つの変形であり，その高度化である。

「言語作品は言語にとらわれている手段では解明できない。言語による分析は言語の象徴系列を利用する以上論点先取りの誤謬に陥るからである」。私たちは，以上においてこの〈*petitio prinzipii*〉を避けるためのメソッドについて論じた。これが書き手，主人公と読み手の関係にとって前提であろうから。

②意味法則：詩の統一と展開の法則

書き手と読み手と作品の主人公の問題は，これまでの議論を踏まえたうえで，結論を先に述べれば「ゲーテの統一と展開の法則」が導きの糸になるであろう。

この法則は，言語作品（詩）の書き手と読み手の間の関係を，意味措定と意味解釈という「相互的意味付与過程」として円環的に把握する見方を定式化している。シュッツによれば，それは以下の(a)に始まり(g)に至る「かならず *notwedig* とりかえできない *unvertauschbar* 特殊であって *spezifisch* 意識的である *bewußtseinsmässig* 連関」を「発生論的に説明する」という意味での「意味法則」である。

持続における書き手の根本体験（a）―詩の象徴系列における象徴化（b）―言語形成活動における意味措定作用（c）―客観的言語連関（言語ゲシュタルト）（d）―読み手による言語ゲシュタルトの意味解釈（e）―普遍的本質的なものへの還元による詩的なものの再解釈（脱象徴化）（f）―読み手の純粋持続体験への再解釈（g）［ibid. 266］

書き手には（a）（b）と（c）そして（d）にいたる体験の言語象徴化の過程が発生論的に，また読み手には（d）から（e）（f）と（g）へといたる言語の段階的脱象徴化による体験への還元過程が発生論的に解明される。前者の象徴化の系列が「発展の意味法則」Gesetz der Entfaltung であり，後者の脱象徴化の系列が「統一の意味法則」Gesetz der Einheit である。あきらかにこの意味法則は普通にいわれる「規範的当為規則」とも経験的規則命題とも異なるものである。「体験」から出発して「言語」に至り，反対に「言語」から出発して「体験」に至る，「言語作品」一般の「発生的」的説明の「仕方」「見取り図」である。「遂行的行為から達成的行為へ」の途と「達成的行為から遂行的行為へ」の途と言いかえてもよい。加茂川を下るみちと上るとでは京の景観は異なる。ましてや読者と著者の間においておや。「体験」と「概念」を媒介する「言語の意味法則」の独自性の索出的意義を再認識しなければならない。

言語作品に関する多くの評論が陥りやすい混乱は，一定の段階を踏んで遂行される意味措定と意味解釈の「必然の，交換不可能の，特殊の，意識に適う連関」のいずれかの契機を過小評価したり，過大評価したり，無視したり，無知であったりする説明の「一面性」によると考えら

れる。

## 結び

言語の象徴にかかわって展開した以上の議論は「語る私」が「体験する私」（主観主義的直観主義）と「概念する私」（客観主義的実証主義）とを媒介する「生活世界の実践知」［Srubar: 1988, 198. 258］としての言語―「文化」の基礎―のもつ独自な役割（間主観性）に注目することから出発した。「語る私」の基礎づけは，言語は「概念」であるとする立場からも言語は「体験」であるとする立場からも成功しない。むしろ「概念」は「語られた言葉」のもつ意義の地平に立ち返ることではじめて明らかにされ，さらに，この言葉の意義は「体験連関」のなかに深く係留されている。逆に「無定形の体験」は語られる言葉をとおしてはじめてその意味が与えられ，さらに「概念」へと定式化される。私と汝の交点，社会性における体験と概念の「統一と展開」，一致と不一致の円環運動の媒体としての言語。

言語の発生的現象学的説明は，物語の自己論的アプローチの「基礎づけ」（構造論的・行為論的アプローチを基礎づける）的意義（張江氏）―を裏づけるものと考える。またゲーテの「統一と発展の法則」論の系統的な整理は，2つの「語り」（浅野氏）の指摘を積極的に受け入れ，これをさらに精緻化するうえで役立つと思う。書き手と読み手それぞれにおける「行為者」（私意識）の遂行的行為と達成的行為の基本関係が明らかにされてはじめて作品内の「主人公」の語りも，いわば「劇中劇」の行為者問題として入れ子型の構造として把握されるであろうから。

「私語り」による「社会の現象学」の可能性について再考する機会を与えて下さった，社会科学基礎論研究会にたいして誌上を借りてお礼を申し上げたい。

## 註

1） シュッツの言語論は，カッシラー［Cassirer: 1994, Erster T., 99f.］を介して「主体と客体の間の媒介者としての言語」そこから帰結する「矛盾的存在としての言語」（フンボルト）理論［Srubar: ibid, 238］の展開にある。シュッツは，カッシラーを含む同時代の新思想の台頭とこれに関連する社会科学の新動向（新カント学派，現象学，ジンメル，ベルクソン，ディルタイ，シェーラー，マックス・ヴェーバー等）にたいする強い関心を抱いていた。なかでもR・カルナップの著作『世界の論理的構成』*Der logische Aufbau der Welt*（1928）は興味味深い。カルナップはフレーゲ，シュリックのヴィーン学団，ヴィットゲンシュタインなどとともに数学の形式的性格は「現実の世界の偶然性」から独立であるという信念，「論理実証主義」を当時提唱した。言語作品（体系としての記号）に拘る「論理整合性」の精神である。シュッツは「意味の適合性」の精神を対置して，言語の象徴的行為の理論を展開し，やがて *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*（1932）を著すのである。「言語と言語作品」の問題が「遂行的行為と達成的行為」の構造および自他関係の社会性の問題として概念される［佐藤：2000，6-22］。

2） ここからシュッツは「動機の相補性の理念化」（理由動機と目的動機）の発想を得る。相互行為的主体の「視界の相補性の一般的定立」の公準の原型はここにある。「語る私」における「汝のなかの私」と「私のなかの汝」の両立可能性の基礎が明るみに出される相互的視座転換，行為＝相互行為の複合理論ともいうべき「ミクロ社会学」（間主観性の問題）の現場を見据えることである。この言語の象徴性の観察は，同時代のあらゆる社会科学の潮流のなかではやはり異色である。「その視座が egologisch

でありその方法が reflexiv である」（トーマス・ルックマン）「自己論」が，航海の途上で出合う幾つかの難所において座礁せずに，「社会の現象学」の大航海を無事成功させるルートの策定が「言語の奇跡」を語るシュッツの言語観，象徴としての言語の論述から眼に見えてくるようではないか。

## 主要文献

A. Schütz（1981）*Theorie der Lebensformen* (hrsg., I. Srubar) Suhrkamp

浅野智彦（2001）『自己の物語論的接近―家族療法から社会学へ』勁草書房

浅野智彦（2004）「私」はどこにいるのか http://wwwsoc.nii,ac.jp/docs/2004

張江洋直（2005）「シュッツ社会学の継承と展開」『年報社会科学基礎論研究』第 4 号

佐藤嘉一（2004）『物語のなかの社会とアイデンティティ』晃洋書房

佐藤嘉一（2000）「アルフレッド・シュッツにおける『建築の意志』」（『情況』）

廣松　渉（1983）『もの・こと・ことば』勁草書房

吉本隆明（1990）『定本言語にとって美とはなにかⅠ』角川選書

# Schutz's Theory of Language and Egological Approach: 'Identity and Society in Narrative' Reconsidered

SATO Yoshikazu *

**Abstract**: In December of 2004 at Tokyo Gakugei University, under the auspices of the Shakaikagaku Kisoron Kenkyukai, a meeting was held for joint reviews of the present writer's book, *Identity and Society in Narrative* (2004, Kôyôshobô). On that occasion I received many valuable critical comments on my above-mentioned book from several commentators including Prof. Tomohiko Asano, Prof. Hironao Hrie and others. Mr. H often requested me thereafter to offer some reply in good earnest to them. As such is the case, I have all through concerned myself about the matter of leaving my views open.

In this paper I would like to make some reconsideration of the same issues, taking into account the problems which Profs Asano and Harie brought up at the meeting, that is, (1) the problem of "intended two layers" existing in three different approaches, i.e, the problem concerning reality construction of *first order* (the egological approach) against that of second order (the structural approach and the actional approach) — Harie, and (2) the problem of interrelationship of 'author', 'hero or heroine' and 'reader' in the I-story — Asano. These are inescapable problems which one must endeavor to make clear, if and in so far as one aims at approaching to 'social reality *within* a worldly self'.

In this paper I pointed out that all the discussions concerning the problems of (1) and (2) originated from the problem of symbolic functions of language. In another words, regardless of whether we are concerned in 'a speaking I', 'a hearing I', 'a writing I', or 'a reading I', we have to take notice of the *sui generis* role of language (its nature of 'intersubjectivity') as 'practical knowledge of life world' (I. Srubar), that is, as the base of culture, which mediates the experiencing "I" (subjectivistic intuitionism) and the conceptualizing "I" (objectivistic positivism). If we take either the stand that the speaking "I" is founded on the language as *conception*, or the stand that the speaking "I" is based on the language as *experience*, we do not meet success in affording a good foundation on the speaking "I". Rather, the *conceptionalizing "I"* will be only clarified when we return to the horizon on *significance* of the spoken words used by the speaking "I". And further we will find out that the *significance* of these spoken words is deeply anchored into the 'experience-connections' of the experiencing "I". Conversely, 'amorphous' experience of the experiencing "I" finds its meaning only through the spoken words, and it is furthermore formulated into the conception. As illustrated in this paper, the language functions as medium of the circular movement of 'experience' and 'conception' in everyday life. Through language of the *third* realm (A. Schutz) in life world, 'conception' of the (*second*) realm is unified (fused) into 'experience' of the first realm, and conversely, through language, experience develops into conception.

Conclusion: Thus, firstly, the explanation of language in terms of genetic phenomenology teaches us, I think, the indispensability of attaching basic significance to the *egological* approach of narrative, on which the structural, the actional and other approach are founded (Harie's problem). And secondly, we must positively accept Asano's proposal of making distinctions between two (or three) types of narration, now that we have investigated Goethe's 'law of unification and development' of the poem. Only when we realize clearly the fundamental relation between act (Handlung) and action (Handeln) of 'writer' and 'reader' respectively as "the actor" (I-consciousness), we can understand the narration of a hero in a literary work as a problem of the actor in 'a drama within a drama', which finds always a shape in nested boxes.

**Keywords**: experience, language, conception, hero・author・reader, forms of life, a speaking "I", genetic phenomenology

＊Professor Emeritus, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan Universit